

誰もが知りたい
ローザンヌ宣教シリーズ

No.15
伝道と仏教徒



*Let
the Earth
hear
His Voice*

**Lausanne
Occasional
Papers**

No. 15
Thailand Report-

**Christian Witness
to Buddhists**

Lausanne Committee for World Evangelization

関西ミッション・リサーチ・センター/日本福音同盟

誰もが知りたい
ローザンヌ宣教シリーズ

No. 15

伝道と仏教徒

(1983 年)

一 目

次

邦訳出版に際して（理事長 服部嘉明）	1
推薦のことば（本田弘慈）	3
伝道と仏教徒	
序 言	4
1. 仏教の世界	5
a 仏教徒の地理的分布	5
b 歴史的背景	5
2. 小乗仏教	6
a 小乗仏教の世界観	6
b 重大な神学的問題点	7
c 伝達のための核心的な諸問題	11
d 実際の方策のための若干の原則	17
3. 大乘仏教	23
a 大乘仏教の世界観	23
b 日本人の生活における大乘仏教	25
c 大乘仏教の信徒のための伝道方策	27
結 論	40
a 総合的な方策の必要性	41
b 基本的な問題点の要約	41
c 継続的に実行するための示唆	42

ローザンヌ宣教シリーズ

邦訳出版に際して

近代におけるキリスト教会の宣教歴史にとって、1974年7月、スイスのローザンヌで開かれた世界宣教国際会議は、極めて画期的なものとして高く評価されてきました。単に、世界150カ国から、プロテスタント135教派または団体から、約2500人がキリスト者にとっての至上命令である宣教について、共に考え、学び、論じ、祈りあうために集まったというだけが、その評価のすべてではありません。（もちろん、それ自体すばらしいことです）。むしろ、次の二点にそのような高い評価の焦点があるようです。ひとつは単に10日間という会議だけに終わらず、そこで考え、論じられたことが、継続的、かつ進展的に今に到るまで尚も、変動を続ける現代の世界において教会は如何にその宣教の責任を果たしてゆくべきか、組織的に委員会などによって考え、論じ続けられていることです。1980年6月にタイ国のパッタヤで開かれた「世界宣教協議会」などはそのよい例です。もうひとつの点は、世界における福音宣教ということが、垂直線的にのみでなく、それとともに、文化及び社会をグローバルに、巾広く捉えながら人間の全人的な救いということとして、福音主義の立場から真剣に取りあげられて来たことです。

今まででもそうでしたが、特に現代では、キリストの福音宣教、世界の福音化ということは、各自、各教会が、おのおのの置かれている文化的、社会的現実の中で宣教の業に参与しながら、同時に広く世界的な視野に立った教会、または各自としての性格づけ、位置づけを前向きの姿勢で維持してゆかねばなりません。ローザンヌ宣教シリーズの多くは、そのような大切な問題を極めて適切に取扱っています。また、関西ミッション・リサーチ・センター（KMRC）も、その創設当初より、日本という文化と社会の中にありなが

ら、世界的な視野をもった福音主義の宣教研究所として活動して来たことを思いますと、今回そのシリーズを、日本福音同盟の理解ある協力を得て、このような型で邦訳出版し得るのは、神の不思議な御摂理であると考えざるを得ません。今後、順次邦訳出版する計画のこのシリーズは、いづれもキリスト者であれば文字通り「誰もが知りたい」内容のものであることを確信しています。また、出来るだけ多くの人々に、愛読書宣教シリーズとして利用して頂き、みんなで、日本の宣教、世界の宣教について考え、学び、祈るための貴重な資料となるよう願っています。

終わりに、このシリーズの日本語翻訳及び出版権を許可下さったローザンヌ世界宣教国際会議の継続委員会と、このシリーズの出版に全面的に協力して下さい下さった日本福音同盟、また側面から支援して下さい下さったノールウェー・ルーテル伝道会に心から感謝の意を表わします。

1983年4月3日イースター

関西ミッション・リサーチ・センター (KMRC)

理事長 服 部 嘉 明

「推薦のことば」

日本福音クルセード主管

本 田 弘 慈

私は仏教の家に生まれました。本願寺の金庫といわれている福井県の、熱心な仏教の家に生まれました。父は私が生れた時、寺の僧侶に私の名前を付けてもらったのです。「弘慈」とは弘法大師の「弘」、また慈恵大師の「慈」によったようです。そして家では、朝夕、仏壇の前で、鐘を鳴らし、手を合わせて仏像を礼拝し、そして始めて食事をしたものです。

また、折々、父や祖母の名代で、寺に詣ったり、墓に参っていました。私は宗教とは仏教で、念仏を称えることが救いの道であると思っていました。

その町は70年後の今日も変りはなく、人々は仏教に依存しています。この町の生れであった私が、ある日、友人に誘われてキリストの教会に出席しました。それがやがて私の生涯を変えるものとなったのです。

仏教徒への伝道、それはキリスト教の福音の伝道の中で、最も困難なものの一つであると思います。何度も私は故郷の町に帰って伝道していますが、人々が古い宗教、格別、仏教から離れることを拒み、因習に捕われています。それは、この古い宗教の背後にサタンの手があるとは思いますが、また長い間、先祖が信じてきたものから離れることの不安と恐怖があるからです。

今回、関西ミッション・リサーチ・センターと福音同盟によって、この良書が出版されたことはうれしいことです。これは、仏教徒たちの暗黒と悲惨を明示し、また、その中から如何にして解放し、救いに到らせるかを教えている本です。その内容は平易にして卓越しており頑迷な仏教徒を神に導き、キリストの救いに与からせるのには、最良のものと信じます。是非とも多くの方々が手にして伝道に励まれることを祈ります。

伝道と仏教徒

序言

この報告書は仏教思想の二大学派ともいべき小乗仏教（南方派）と大乘仏教（北方派）を取り扱っている。

この研究グループにたずさわった者はスリランカ、ビルマ、タイ、日本、韓国から来た者の他に、ブラジルや合衆国まで、本国から追放された仏教徒や他宗教からの回心者の小集団が見いだされる国から来た者もいる。

この研究を動機づけた問題は、これらの国では比較的少数の仏教徒しか福音に応答していないということである。（ただ韓国だけは、聖書の神概念に似たハナニムという土着の強い神概念がある点で、例外である。）例えば、日本やタイでは人口の1パーセント足らずのキリスト者しかいない。

キリスト教が仏教と接触をはかったのはネストリウス派の時代にさかのぼる。それ以来、絶えまないキリスト者のあかしがあったにもかかわらず、初期のローマ・カトリック教会の宣教活動も、時代のプロテスタント教会の努力も、教会成長という意味では、乏しい結果しか生み出さなかった。事実、アジアにおける仏教徒への初代の伝道は、今では跡かたもなくなっている所もある。

仏教徒のただ中で自己保存的に生き続けてきたキリスト者の共同体が見い出されないのは、三つの大きな原因がある。迫害と折衷主義、それに仏教徒の共同体の社会的結束を打ち破ることのできなかった教会の失策がそれである。これらが今日においてもキリスト教宣教の働きにたずさわる者や伝道者が直面することなのである。

この研究の目的は仏教徒に伝道するための働きを評価し、上記の同国での仏教徒伝道のための効果的方策の発展を促す諸原則をたてあげることである。

キリストの大宣教命令は、多くの仏教徒をも含むすべての人々に、キリスト者が福音を伝えるべきであるとの指令だからである。仏教徒は真理を求めているし、かつイエス・キリストは「真理」であるからこそ、我々は二重の意味で福音を宣教すべき任務がある。

この研究の根本的な前提は、仏教徒への、実践的かつ効果的な伝道方策を展開する必要を十分認めつつも、この伝道の働きは究極的には神のなさることだ、と理解していることである。それ故我々は神の恵みに全的に依存するのである。

1. 仏教の世界

a 仏教徒の地理的分布

今日、チベット、日本、韓国、中国、そして東南アジア、南アジアの何百万人という人が何らかの形の仏教徒である。普通はアニミズム（精霊信仰）と結びついており、また時には現代の世俗の物質主義に傾いている。

仏教思想に影響されている人々は、1980年の調査による未伝道の人々の中では最大の障壁である。その数、十億で、世界人口の四分一、未伝道の人々の中での三分の一である。この中には、中国本土にいる人々、そしてその他に、何らかの形での仏教徒である四億人のアジア人が含まれている。過去三十年間に何世紀にもわたる仏教哲学が中国から消し去られたとは思われない。変化は起ったであろうが、様々なる精霊信仰と結びついた仏教的概念は未だにこの大国の中に浸透している。

b 歴史的背景

その二千五百年に亘る歴史の中で、仏教は世界の大宗教の一つであった。それは主に、最初の二千年間に拡大していった。ケネス・S・ラトゥレッ